

私がこの長崎の地に初めて足を踏み入れたのは、昭和29年（1954年）の3月でした。長崎大学を受験するために、島根県津和野町から汽車に乗って丸一日かけての長旅でした。その時のときめきと新鮮な驚きは、遠い昔のことのようでもあり、つい最近のことのようでもあります。

あれから52年の歳月がながれ、長崎の街はいま大きく変わろうとしています。出島ワーフ、水辺の森公園や出島周辺の修復、長崎県美術館や長崎歴史文化博物館のオープン、女神大橋の開通など、文化・観光面でのランドマークが誕生し、ロマンの街長崎の佇まいを色濃くみせてくれています。こうした魅力あふれる街にあつて、決して大きくはないかもしれませんがすばらしい個性をもつ長崎大学を誇りに思います。

学生は今も昔も人それぞれに夢を抱いて入学してきています。「夢は、願ひ続けていれば必ず叶う」と言いますが、学生が勉強だけではなく、いろいろな経験を積みながら成長し飛躍していくことができる環境を整えることも、大学の大きな使命の一つではないかと思えます。大学の法人化を契機に産学官の連携強化など、更なる改革に取り組んでいかれるよう期待しています。

放送業界も、今年12月には日本全国のテレビ局で地上デジタル放送が始まります。デジタル化に対応するためには多額の経費がかかります。私達はそうした厳しい状況にあつても、地域にしっかりと根をはって地元を応援するローカル放送局としてたくましく生き残っていきけるように、企業体質の改善と強化に取り組んでいるところです。



長崎放送会長

富田 忠溥
Tomita Tadahiro

1935年1月生まれ、島根県出身。1958年長崎大学経済学部を卒業し、同月、長崎放送入社。1980年取締役ラジオ局長から、東京支社長などを経て常務、1992年専務取締役。1996年副社長、1998年代表取締役社長を経て、2004年会長に就任。公職では、2001年と2005年に長崎市教育委員長を務め、2000年11月、長崎市特別職報酬等審議会委員も務める。

インタビュー
長大生に望むことは
どんなことですか？

自分の経験から言えるのは、「夢を抱き、それに向かって進んでいけば最後には実現する」ということです。どんな時でも夢に対する熱い思いを忘れず、それを実現するために自分なりの努力をしてください。そういう努力をすれば、その過程でいろいろな運に恵まれ、それなりの結果が出ると思いますよ。運といえば、周囲の人のサポートや価値観が同じ人との出会いもそれにあたるでしょう。そういう機会や人に出会ったら、その人との縁を大切にしてください。その方々の応援があつてこそ、夢は実現に近づくものでもありませんから。

気持ちを引きつめすぎたり焦ったりせず、一步一步確実に進んでいく姿勢でぜひがんばってほしいですね。

